

# 名古屋市蓬左文庫蔵 『続学舎叢書』 翻刻 (十六)

浅井圭子

今回は、名古屋市蓬左文庫蔵『続学舎叢書』翻刻(十五)「あいち国文」第十五号 令和四年二月 あいち国文の(会)に続くものである。今号では、『続学舎叢書』第四冊の五二丁表から六〇丁裏の『琵琶記』、六一丁表から六二丁裏までの『佐埜某刺田沼氏弁』、六四丁表から九四丁表までの、表題は付いていないが、「目安裏書初判之事」に始まる『公事方御定書』の翻刻を試みた。

『琵琶記』は、「市も此音曲を好み高山か流しの名師餘多に尋置し言葉の金玉ひろひて書記侍る」(五九才)、奥に「古本之奥書曰 君達花そろへといふにや絵か、せしによく似させたるもなし人く、あたらせ給ひしらぬわらひ草とこそ」(六〇才)とあるが、作者、成立は不明である。国文学研究資料館の日本古典籍総合目録によれば、東京大学蔵

の同名写本が在ることが知られるが、マイクロソフト化されておらず未見。本文一行目右下に「玉」と「晁」の印あり。内容は、『平家物語』成立の経緯、平家琵琶の音曲と語りの起源、検校の系譜、琵琶の演奏と語りの方法、琵琶の歴史、琵琶造りの職人と名器についてなどである。

平家琵琶の起源については、館山漸之進氏の「平家音楽は、樂聖行長の創作にして、慈鎮、生佛と協定の音楽なりと判定する」(『平家音楽史』明治四三年一〇月、木村安重発行 第一編平家音楽の起源及び沿革)とある説と同じである。ただし、同書には、散逸した書を含む平家琵琶の関連書が掲載されているが、当該本と同一内容の書についての記述は無い。

本文中に、平家語りの声の出し方や、特に「拾」、「口説」、「白声」の発声の方法について説明がある。『平家の音楽』

当道の伝統―(薦田治子著 第一書房、二〇〇三年二月)には、第三章の「二『平家正節』の特徴と先行諸本との関係」に、譜本に記されている「拾」、口説、「白声」について詳しい説明があることから、当該本が『平家正節』と関連があった可能性が考えられる。また琵琶の歴史について、「琵琶も上代中昔の伝ハ皆楽器ニて甲に厚薄有磯深く腹板薄高音浮て平家琵琶に用ひかたく其品とを作り直せり」(五九オ)とあり、平家琵琶は、平安朝以来貴族が使用していた楽琵琶から変化したものとする薦田氏説と同じである(同書 第六章平家琵琶―楽器と奏法)。

『佐桠某刺田沼氏弁』は、天明四年三月二十四日、田沼意次の嫡男山城守意知が、江戸城において佐野善左衛門に刺されるという刃傷事件に關しての書である。刺した佐野を弁護している内容である。読点と、個有名詞を示す傍線と、ミセケチが、朱で付されている。奥に

或人云、居是邦不非其大夫、蓋家田某弁田沼佐野之得失、冢田某不聞人過失如聞父母之名、某為人可知也、此予不如斯與、(六一ウ)

とあり、作者は冢田庸か、不詳。

国文学研究資料館の日本古典籍総合目録によれば、『佐桠某刺田沼氏弁』(さののな)がしたぬまうじをさすのべん)は、蓬左文庫蔵『続学舎叢書』所収の当該本のみであ

る。成立は不明。本文一行目右下に「玉」と「晁」の印あり。

『天明紀聞』(三田村鳶魚編『未刊隨筆百種』第二卷所収 中央公論社、昭和五一年七月)の天明三年十一月の項には、「田沼主殿頭御子息山城守殿、今般五千俵被<sub>レ</sub>下、若年寄被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候、其上御用番御免、築地<sub>江</sub>屋敷被<sub>レ</sub>下引移<sub>二</sub>相成候、誠に前代未聞之繁栄にて、当時出頭、肩を並ぶる人なし(略)」とある。大飢饉の中、田沼意次による政權の対策の無さ、独裁ぶりを知ることができ。天明四年の項には「(略)其後三月に相成候てより諸方人減<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>行、是迄の奉公人いづれも暇相出シ候ニ付、俄ニ無宿之者多く相成り、段々ト六万坪へ被<sub>レ</sub>遣候得共、跡より追々ト殖参<sub>レ</sub>り小屋も充満する程之由、是全ク米非常ノ高直故也、此月廿四日若年寄田沼山城守殿へ於<sub>二</sub>營中<sub>一</sub>ニ新御番佐野善左衛門何之意趣にや切懸ケ、右手疵にて翌日終ニ死去也、委細之義ハ聞伝次第可<sub>レ</sub>記ス」とあり、当時の世上と事件について、記録されている。

『宝曆・天明期の政治と社会』(講座日本近世史)山田忠雄・松本史郎編 有斐閣、一九八八年一月)の一章「天明期幕政の新段階―田沼政權と評価をめぐって―」の「四田沼意知暗殺事件前後の動き」には、当日の幕府の記録など関連資料が掲げられている。「新御番蜷川相模守組佐野善左衛門於殿中田沼山城守<sub>江</sub>手疵為負候ニ付吟味仕可申上旨被仰渡候、於評定所吟味仕候趣左之通」なる評定所に

おける詮議の吟味書の内容から、私怨による説、政治的暗殺説ではなく、「乱心による刃傷がやはり実相ではなかつたか、ということになる」としている。世人の評判については、「世人にとつてすぐれて反田沼的な空気を敏感に汲みとらせるような雰囲気をかもし出した」として、例に、「(略) 佐野善左衛門を殊の外ほめ惜む事甚し、是田沼をにくむのあまり成へし諸人の心皆一同なり」などを引いている。刺した佐野善左衛門に同情する落書類が多く出されとあり、当該本が書かれた背景がわかる。

#### 〔「公事方御定書」〕

「日安裏書初判之事」で始まる当該本は、江戸幕府の民事裁判の法令文書『公事方御定書』下巻の前半部である。表題はなく、目録と、全百三箇条のうちの四十八箇条「密通御仕置之事」までである。最終丁に余白があることから、玉晷が書写した段階で、この様態の原本であったかと考えられる。国文学研究資料館の日本古典籍総合目録に、当該本は確認できない。第四冊の目録に「一」とだけあって、表題が書かれていないためであろう。仮に〔「公事方御定書」〕とする。本文中に「延享元子年以来」とあるが、成立不明。一行目右下に、「玉」と「晷」の印がある。

各条文に通り番号がなく、「全」と「評」を合わせた文字が掲げてある。「全ての評定所」の略かとも考えられるが、

不明である。他本に、この用例は確認できなかった。ただし、「村方出入<sub>二</sub>付江戸宿雑用并村方割合之事」、「欠落もの之儀<sub>二</sub>付御仕置之事」、「捨子之儀<sub>二</sub>付御仕置之事」、「養娘を遊女奉公<sub>二</sub>出し候者之事」、「隠売女御仕置之事」には付されていないので、(欠)を付して示した。

改定条文の箇条書の肩に、「従前々之例」、「享保六年極」、「寛保三年極」、「追加」などの注記が付されていない。『御当家律』と同じである。「従前々之例」は、その条文が、従前の判例のまま引用されていることを示す注記、「享保六年極」などは、その条文が改定された年号を記す注記、「追加」は、増補された条文であることを示す注記である。改定が行われた経過を知ることができる注記で、殆どの本に記されている。

追加条「重<sub>キ</sub>御役人之家御仕置<sub>二</sub>成候節其主人差扣伺之事」(七〇オ)がある。宝暦四年第五次増修による追加条文である。蓬左文庫蔵写本『公事方御定書』、『棠蔭秘鑑』と同じである。(『御当家律』には無い。)

蓬左文庫蔵写本『公事方御定書 全』(文化十三年□□寛保二年相定 尾二八一七)と、当該本とを校合したところ、当該本に条文の通り番号と箇条書の肩の注記がないことと、誤写と落脱があるという違いはあるものの、内容については、ほぼ同じである。主な校異をあげる。当該本―蓬左文庫蔵写本である。

- 〔六七ウ〕其趣申通辭一其趣申通し（六七二ウ）送罪者一遣罪者 邪曲一私曲（七六オ）捕<sub>ニ</sub>遣一捕<sub>ニ</sub>遣候類は不心（七八ウ）借金一借り主右金子（八〇オ）位間一位反別（八二オ）（欠）一五拾両以上百両迄 五拾石以上百石迄、式百五十日限（八七オ）請入主一請人人主（九一ウ）返之可申事一可被返下（九四オ）中追放一男女とも二中追放
- 『公事方御定書』は、改定と書写が何度もなされてきた結果、多くの写本が現存しており、定本の確定が課題となっている（服藤弘司著『公事方御定書』研究序説一『寛政刑典』と『棠蔭秘鑑』収録『公事方御定書』一）創文社二〇一〇年六月）。翻刻されていて、見ることができた本の中では、当該本に近似している本は、以下の三本である。
- ①『棠蔭秘鑑』亨（司法省蔵版・法制史學會編、石井良助校訂『徳川禁令考』別巻 創文社 昭和五六年二月）
- ②『公裁秘録』寛保三年増修本（高塩博氏蔵）（高塩博著『江戸幕府法の基礎的研究』《史料編》《論考編》）
- ③『御当家律』延享元年増修本（国立公文書館内閣文庫蔵）（高塩博著『江戸幕府法の基礎的研究』《史料編》《論考編》）
- （汲古書院）誤写があり良質の伝本とは言いがたいが、「全体としては延享元年増修の姿を示している」（三四九頁）。

### 【凡例】

- 翻刻にあたり、底本にできる限り忠実であることを原則としたが、読解の便宜上、次のような処理をした。
- 1、漢字は、現在通行の字体に統一した。異体字や略字なども通行のものにした。但し、哥・鉢・云など、一部そのままにしたものもある。
  - 2、誤字、当て字、送り仮名、仮名遣いもそのままにした。
  - 3、合字は、開いて表記した。
  - 4、底本に稀にある濁点は、そのままとした。
  - 5、各丁末に、丁数・表（オ）裏（ウ）を、符号で示した。
  - 6、改行は、必ずしも原本に対応しているわけではない。

### 【翻刻】

琵琶記

（白紙）（五二オ）  
（五二ウ）

琵琶記

（印印）

平家物語ハ伶人の長たりし従六位信濃前司行長といひし者世を連れ比叡山に閑居して常ハ無動寺の室に入吉教を聞徒然の折々に過つる永久の比より文治建久に及び平氏盛衰の有様を作文して慈鎮和尚大和詞諸書の文章諸経の要文共を尋十二巻に撰ぬ四條院之御宇

嘉禎曆仁之比にや侍りけん叡岳に性佛  
僧正といへる積学の能化有て当山檢校職を  
持てり後に盲僧となりて年を経ぬ世の中の

〈五三オ〉

盲友の内の一級を定め或ハ慶善樂の舞人の  
官名にし侍る後代の業なるへしされハ性佛  
僧正の跡を止て禁色の衣を免許素絹を着し  
魯桓公のたくみにせし其纓燕尾をかつく是ハ

〈五四オ〉

盲人の地神經を唱へ八卦卜方を事とし或ハ  
珠数を引印を結び被祈念をし槌物を請下  
賤となりし業を哀れむ或時山王權現の靈  
夢神勅を得て此物語を聞覚へ唱ふ其音  
調台家称名を以せり梅尾明惣忠上人の作れる  
式と名付て四卷あり三井寺の妙觀上人節を  
付て中音初重二重品とあり台家言家の  
称名と是を云原平家物語に此節はかせを  
付て末の世までの盲僧に伝へ妙音菩薩の甞ひ  
給へる清淨の響有ル四弦を弦し音声の息  
繼とし一日經の供養になし侍る五種の行の

〈五三ウ〉

撰家大閣相国の隱室剃髮の後着せらるゝ  
三十六官の級を定而至上を檢校職と呼筑紫  
方檢校城都坂東檢校如却都此音妙を得たり  
伏見院御宇源家久我の庶子に盲人有て  
洛東八坂の里に閑居せり其実名知れかたく  
通基公の連葉に侍らんか音曲を好み城都に  
習ひ得て檢校に至り八坂檢校城玄と云花族  
の縁によりて則久我の家を伝奏官領となす  
近代寛永の末正保慶安に及迄紅衣を着  
せしにいつとなく今ハ官衣をさりしハ古例を  
失ふ衰相なり小松の帝の皇子兩世の御子

〈五四ウ〉

内頓写ハ行時の油断なく一念不生にて書する故に  
禪定の縁となり音声ハ衆僧の眠りをさまし  
聴衆の凡心を転ずる使力となれり檢校職ハ  
顯密二宗叡山高野八幡の社僧又社家の号に  
呼或ハ禁裏佛会執行の上卿を俗檢校と云へり  
別当勾当專当衆分官五台言兩流律家  
一向類宗徒門徒等にあり或は四度と呼ハ当道

盲君なるを皇后雅子あはれみて九州の内に  
領を寄らる是を諸国の盲人に施行し給ふ  
後代に及び武家の世となり絶侍る其恩徳  
を報し京師禪刹請取衆庵にて年々春  
夏二季石塔涼見と云供養を初檢校の導  
師を立平家を語り施物をなし大瓶に柳楓ヲ

餅り読経の巻数礼物久我の館に送る元弘  
建武の比都に如都法弟明石覚一檢校といひし  
人あり本ハ足利治部大輔將軍尊氏の門葉  
にて播州明石に領侍り盲人と成て是を在所と  
す音曲世二勝したり中古に木幡性一檢校滝

〈五五オ〉

沢髣一檢校といひし名人出来洛北朝日寺の  
辺に会講して一部の平家を語りひろむ其觀  
式屋台をかまへやらぬを結諸人こそりて聽聞ス  
是より代々に一部の講有之其門流の譽の輩  
ましはりて当人助句を語一部の平家の習ひ  
有て卷統一句の初の云出しの節をかゆる事  
侍り縦ハ二の卷ならば山門滅亡の口説を高の  
声にいひ或ハ外の一句の初を白声にも語れり  
間の物ハ其時により前後の一句に付て語様有  
句の外なれハ白声にいひてよきなり又部に  
入さる菖蒲の前大佛供養品の一句も

〈五五ウ〉

十九世に及へり此丹一か弟子ニ本山小寺前田  
といひし者譽有本山檢校ハ短命にして  
さりぬ小寺檢校温一前田檢校九一ハ法春  
学所なりしか共私の了管侍りしにや  
此物語の文章卷てふしく品もかわり末  
の弟子小寺流前田流といひなしてわかり

〈五六オ〉

同じく助音も成かたく侍る温一檢校ハ声秀  
逸にして花の朝の宴に愛せられ九一檢校  
八月の夜会にも声さひしく靜なるに興  
侍りぬ唐の謝安ハ声の譽有され共鼻に  
痛有て声濁れり洛下の人其音曲を学ふ  
者稀なり皆鼻を抜へて声の濁れるを  
似せたり温一か弟子ハ声の器量に不及  
九一か弟子ハ古く作りなすといへとも猶似るへく  
もなしされハ此音曲は声の根本成故に  
能得たる者かたく皆云能を式本として虚音  
を出せり根声を知て心を付ぬれハ実声と也

〈五六ウ〉

ありしを今ハ伝へ失ひて知者まれにて結句  
山家幽谷在と所との古当道ハ知る事侍り  
近くハ松本鏡一檢校杉原連一檢校名譽を  
得たり其鏡一か弟子同宿に高山檢校丹一と  
いふ者中古の名人也明石よりハ三十世流沢よりハ

本意に叶へり是を評していハく鼻へ入る時ハ舞ニ  
等しく咽にていへは声しハる口をひらけハ船歌  
説経に似たり口を閉れば齒にかゝり喰切やう  
なり口を含めは声色過て小歌の吟有て

顔曲出る皆音曲の病也さらハいつれをよしと  
せは先身の行儀を正し背を延胸腹を

出し顔を真向に持五躰を直になせは氣血め  
くりて声のつかへなし心を胃腑に納めて語レハ  
其人との持来りたる高声小音共に格に応して  
聴衆の耳によし人毎にかたりよき所ハ能いひ  
なし語かたき所はふしに難待る其習ひにハ

〈五七オ〉

語よき所ハ心を付す云得かたき三重折声の  
返り兼たるくり上しほりのふしにハ前方より  
心得ぬれハさのみ非声出す三重ハ前をすかし  
末はりに語へきなり声の立限り初めに取越  
ぬれハ後不自由に息詰り続かたく是伝也  
京わらんへのいひ遊にも河原三重一ツ橋は  
座頭の難所といへり首に筋を引額に波を  
た、むを見るも苦しき也三重下りを中音に  
等しく語へからず高音の引次なれハ延てハ  
聞かたくいかにも取詰て語へし折声ハ初メを  
あまりしほらず末へよりしほりて聞よし

〈五七ウ〉

中音ハ一句の内にてハ語よきふし也され共一の声  
二の声の引にかりつめりつたるみつしてハよからず  
引そへて折返しに氣をつけ声の留りに

心有へし中下ハ静かにてよし初重ハ語出シを  
静かに末へかゝる程詰ぬれハ延過る事もなく  
色のふしハ吟に氣をつけ面白過ぬよふに云  
へきなり指声ハいかにもつよくたるまぬを  
本とする也読物にハ品と侍れ其中にてたるみ  
なきやうに云へし琵琶にかゝり踊拍子に  
成てうくのハ悪し句切に心得有へしひろ  
いハ猶拍子物也遅速品ありとかく末を詰て

〈五八オ〉

よし中下の心得有へし延過ぬよふにかいとる  
へきなり惣して拍子にかゝり引息次急なれハ  
聞苦し又延過るよふにてもち、まるならひ  
あり一の巻にて是をいわく縦ハ御輿振の  
拾ひのいひ出しにさかり松とハ声ゆたかに引て  
きれ堤加茂の河原とかい取て語れハ前の延たる  
を取越故に聞よし口説はむつかしく肝要の  
ものなり其人との器量にて云なしかね開口  
文字ひらきいかり返しを専一に云出しの治り  
の字をかるく語れハ聞よく直也重くハ成よく  
しほり口説ハ猶おもからぬか能也とかく浮ぬ  
やうにいふへし白声ハ口先にて語物にあらす  
腹より声を出し色なくつよくいふへきなり

〈五八ウ〉

大方の語人吟を作り傀儡まわしの音声に  
語たり又延喜聖代祇園精舎の吟も唱へ

失ひて祝言愛傷を不知常の平家の吟に

語れり浅増き也一の巻の初めより三四句の

平家の吟移り勸請の巻の内ハ思入の格式皆

習ありといへり市チも此音曲を好み高山か流レの

名師餘多に尋置し言葉の金玉ひろひて

書記侍る琵琶も上代中昔の伝ハ皆樂器にて

甲に厚薄有磯深く腹板薄高音浮て

〈五九オ〉

平家琵琶に用ひかたく其品とを作り直せり

中比雜賀といひし琵琶工代と伝へて是を作る音

響勝れたる有其比永務入道といひし工人

造る是ハ長甲少直也徳岡伯昏或ハ永田喜三郎

トモ工人造り得て近代重宝の比巴有て下挫も望月と

いひし琵琶持て撥面に宮内卿法印探幽野

馬を画し又三日月と呼小琵琶を求め甲の

内に永享の号侍り信州山家にありて宮部と云

盲官持たる印し曲櫃に残撥面を狩野洞

空画せしめ羅紅の袋に入此二面を座右に

〈五九ウ〉

望月

諸人の心ありなは四ツの緒の引手にいばう望月の駒

三日月

三日月の空に詠ハ細けれと光ハあまる四ツの緒の音

誹諧発句

澄きつてなれ望月のひわの糸

三ヶ月ハくたけて音よし比巴のきよく

古本之奥書曰

君達花そろへといふにや絵か、せしに

よく似させたるもなし人くあたらせ

〈六〇オ〉

給ひしらぬわらひ草とこそ

〈六〇ウ〉

佐埜某刺田沼氏弁

冢田庸

印

天明甲辰歳三月巳卯、新軍部佐野善左、刺參政田沼意

知於朝、都鄙唱万歳、老幼称愉快、冢庸曰、人皆謂佐野善

左刺田沼意知者、是不然也、佐野某安能刺田沼氏、門人

曰、佐埜善左刺田沼意知、衆目所視、衆聽所碩、先生何謂

不然也、曰、嗚呼佐野某安能刺田沼氏、門人曰、敢問何謂

也、曰豫讓欲刺妻子、而不能、荆軻欲刺秦皇、而不成、以

卑欲刺尊、而能成者鮮矣、夫田沼氏者、爵貴任重、出蹕入驚、



惟勢亦無与二其於朝也、趨陪者如雲、阿附者如雨、會朝之士、皆如崩其角、膝行且頓首、佐桀某者、位卑祿微、而出入進退无与黨者、其於朝也、立則常磬折、坐則常屈伏斯

〔六一才〕

安能刺斯、曰、雖然佐野善左能刺田沼意知、衆之所視聽焉、不可誣也、曰、嗚呼佐野某安能之、是有所以使之能焉、

曰孰使之、能焉、曰天使之能焉、曰、何以謂之、曰孟子有言曰、人皆有不忍人之心、詩曰、相彼投鬼、尚或先之、行有死人、尚或懼之、此人情所以同然也、然則刺人者、人將有憎之刺於人者、人將有憫之、然而佐野某刺田沼氏天下莫憎於佐野者、天下莫憫於田沼氏者、都鄙唱万歲、老幼称愉快、是何也、必其貪冒僻邪、有逆天拂人者、故天下之士民欲其亡也久矣、湯誓曰、時日害衷、吾及汝偕亡、詩曰、取彼譖人、投卑豹虎、豹虎不食、投卑有北、蓋愛之欲其生、憎之欲其死、是亦人情之所同然也、皐陶謨曰、天明畏自我

〔六一ウ〕

民明威、秦誓曰、民之所欲、天必從之、故佐野善左能刺田沼意知者、是非佐野之所能焉、天矜干民、而假手於佐野也、門人曰、先生之言則善矣、然諸侯大夫猶衆、而天假手於佐野氏如何、曰、國家之法、兵於朝者、絕其世矣、故天為如斯人、不為絕諸侯大夫之世、以假手於微祿之人也、門人曰、善矣、然諸軍部伍之士亦衆、而天何特選此佐野氏、曰、余未知佐野氏之為人、然必也其健勇忠烈、固有出群

者、而為天所選也與、而佐野氏雖位卑也為如斯、人而絕其世者猶有恨焉、然舍其四百石之微祿、而取千百年之美名、乃亦所以為無恨焉乎、齊景公有馬千駟、死之日民无德而称焉、伯夷叔齊餓于首陽之下、民到于今称之、富

〔六一才〕

貴不若德義之高也、門人曰、善矣、猶有語于此、園有大樗、其藥亦長、人惡其張王、而伐其藥、是何不伐大樗、而伐其藥乎、曰樹木亦有命數、大樗之壽其不可有幾焉、藥則年富焉、若伐其大樗、乃其藥益長王、故伐其小樗、而使其大樗自斃矣、是亦天之所以寵賜於園中百世也

或人云、居是邦不非其大夫、蓋冢田某弁田沼佐野之得失、冢田某不聞人過失如聞父母之名、某為人可知也、此予不如斯與、

〔六一ウ〕

〔白紙〕〔六三才〕

〔白紙〕〔六三ウ〕

〔公事方御定書〕

〔印印〕

一目安裏書初判之事

一裁許繪図裏書加印之事

一御領一地頭地頭違出入并跡式出入取捌之事

- 一 無取上願再訴并筋違願之事
- 一 評定所前箱<sup>江</sup>度と訴状入候もの、事
- 一 諸役人非分私曲有之旨訴并裁許仕置等之事
- 一 公事吟味銘々宅<sup>ニ</sup>而仕候事
- 一 重<sup>キ</sup>御役人評定所一座領知出入取斗之事
- 一 重<sup>キ</sup>御役人之家來御仕置<sup>ニ</sup>成候節其主人差扣之事
- 一 用水悪水并新田新堤川除等出入之事
- 一 論所見分并地改遣候事
- 一 論所見分伺書絵図等<sup>ニ</sup>書裁候品之事
- 一 裁許可取用証拠書物之事
- 一 寺社方訴訟人取捌之事
- 一 出入扱願不取上品并扱日限之事
- 一 誤証文押而取申問敷事
- 一 盜賊火附詮議致方之事
- 一 旧悪御仕置之事
- 一 裁許并裏判不請者御仕置之事
- 一 関所を除<sup>キ</sup>山越致候者并関所を忍ひ通り候者御仕置之事
- 一 隠鉄炮有之村方咎之事
- 一 御留所<sup>ニ</sup>而鳥殺生致候者御仕置之事
- 一 一村方戸<sup>ノ</sup>無之事
- 一 一村方出入<sup>ニ</sup>付江戸宿雜用并村方割合之事
- 一 一人別帳<sup>ニ</sup>も不加他之者差遣候御仕置之事

〈六四ウ〉

- 一 賄賂差出候者御仕置之事
- 一 御仕置<sup>ニ</sup>成候者關所之事
- 一 地頭<sup>江</sup>対強訴其上致徒党逃散之百姓御仕置之事
- 一 身軀限申付方之事
- 一 田畑永代売買并隱地致候者御仕置之事
- 一 質地に作取捌之事
- 一 質地滞金米日限定之事
- 一 借金銀取捌之事
- 一 借金銀取捌定日之事
- 一 借金銀分散申付方之事
- 一 家賃并船床髮結床書入証文取捌之事
- 一 二重質二重書入二重買御仕置之事
- 一 廻船荷物出売出買并船荷物押領いたし候者御仕置之事
- 一 倍金并白紙手形金銀貸借致候者御仕置之事
- 一 偽之証文を以金銀貸借致候者御仕置之事
- 一 讓屋敷取捌之事
- 一 奉公人請人御仕置之事
- 一 欠落奉公人御仕置之事
- 一 欠落もの之儀<sup>ニ</sup>付御仕置之事
- 一 捨子之儀<sup>ニ</sup>付御仕置之事
- 一 養娘を遊女奉公<sup>ニ</sup>出し候者之事
- 一 密通御仕置之事

〈六五オ〉

一 隠売女御仕置之事

〔六五ウ〕

全評 目安裏書初判之事

一 寺社并寺社領関八州之外私領  
関八州之内二も寺社領より  
御府内江懸り候出入

月番寺社奉行裏判

一 江戸町中寺社領之町寺社門前  
境内借地之者御府内江懸り候出入

同町奉行裏判

一 関八州御領私領関八州之外  
御領より御府内江懸り候出入

同御勘定奉行裏判

右双方名主家主五人組立合可相濟若不埒明候ハ、  
七日目双方罷出候様裏書可遣事

但支配違江掛候出入ハ評定所江可差出候双方一支配二  
候ハ、  
〔六六オ〕

其奉行所二而裁許可申付在方国江懸り候出入ハ何月二  
幾日評定所江罷出可対決旨裏書いたし三奉行掛り月番

二而初判一座加印

一 山城 大和 京都町奉行  
近江 丹波

但双方共右四ヶ国之者二候ハ、京都町奉行二而取捌

一 和泉 河内 大坂町奉行  
摂津 播磨

但右同断大坂町奉行二而取捌

右八ヶ国之内二而も京都大坂町奉行支配違又ハ余国江懸り  
候出入ハ寺社奉行月番可致初判候尤双方共二右同支配之  
出入  
〔六六ウ〕

御当地江訴出候ハ、支配之奉行所江罷出候御申渡取上申  
間敷候事

全評 裁許絵図裏書加印之事

国境 郡境 御老中加印  
裁許 絵図 三奉行連印

但右之外絵図裏書を以裁許之分ハ三奉行連印  
全評 御領一地頭地頭違出入并跡式出入取捌之事

遠国奉行之支配御代官所并私領百姓他江相懸り候出入其  
所之奉行御代官地頭より断有之候上二而取上可及吟味断  
無之内百姓訴出候ハ、取上申間敷事

一 一地頭之出入ハ地頭より断有之候共地頭二而取捌可相濟  
由申聞取上申間敷候勿論地頭より断無之百姓訴出候分ハ  
地頭江可  
〔六七オ〕

相願旨申渡是又取上申間敷候猶又不相濟由地頭より申聞  
候ハ、頭支配江申立候様二可相達候

但地頭非分之申付二相聞候ハ、伺之上取上可申候事  
一 跡式又は養子等之出入ハ他領懸り合訴出候共先方之地頭

江可願旨申聞取上申間敷候若地頭之裁許不審之事も候ハ

、地頭方<sup>江</sup>承届候上猶又不致落着候ハ、可相回事

一 加判人有之槌成讓状并加判人無之候共当人自筆<sup>ニ</sup>而印形

無相違書面怪敷儀も無之候おゐてハ讓状之通跡式可申付

尤格別之筋違<sup>ニ</sup>候ハ、吟味之上筋目之者<sup>江</sup>可申付事

一 御領所百姓出入は其支配人より添状無之候ハ、取上申間

敷品寄支配人<sup>江</sup>は其趣申通辞猶又相滞候ハ、対談之上取

上可申事 （六七ウ）

一 地頭<sup>ニ</sup>而寺社より百姓<sup>江</sup>懸り候出入も一通り地頭<sup>江</sup>申

達候上不相濟候おゐてハ取上可致吟味事

一 寺社より領主<sup>江</sup>通り候出入訴へ出候ハ、一通り地頭<sup>江</sup>申

達不相濟おゐてハ取上可致吟味事

全評 無取上願再訴出并筋違願之事

一 諸願申出候者一通り吟味之上難成願<sup>ニ</sup>候ハ、難立趣申間

重而願出候ハ、各可申付旨書付相渡し猶又願候ハ、過料

可申付事

但奉行所<sup>江</sup>願出無取上儀<sup>ニ</sup>付過料申付候処遮而箱訴并

御老中若年寄中<sup>江</sup>訴訟<sup>ニ</sup>罷出候ハ、奉行所<sup>江</sup>呼出猶又遂

吟味弥於難立願ハ再過料可申付事 （六八オ）

一 親子兄弟其外之親類<sup>ニ</sup>而も御咎

御免之願は再応願出候共不及咎事

一 惣而願之儀筋違<sup>江</sup>申出候ハ、其筋之奉行所<sup>江</sup>願出候様<sup>ニ</sup>申

付候上再往申出候ハ、其筋<sup>江</sup>遂対談難立願<sup>ニ</sup>而無取上旨<sup>ニ</sup>  
候ハ、其筋之奉行所<sup>ニ</sup>而相応之各可申付事

但難立願奉行所<sup>ニ</sup>而無取上旨申渡候処同役<sup>江</sup>右之願申出

<sup>ニ</sup>おゐてハ寺院侍ハ押込百姓町人ハ手鎖可申付事

一 三奉行所<sup>江</sup>不訴出直<sup>ニ</sup>評定所<sup>江</sup>訴訟罷出候者ハ其筋之奉行

所<sup>江</sup>罷出候様申渡其筋之奉行所<sup>ニ</sup>而吟味之上落着之儀は一

座相談之上可申付事

一 親類縁者之由<sup>ニ</sup>而訴状差出候節当人難願出訳も無之

（六八ウ）

候ハ、当人<sup>ニ</sup>為願可申旨申渡取上申間敷候

全評 評定所前箱<sup>江</sup>度と訴状入候もの、事

一 評定所前箱<sup>江</sup>難立願訴状入候者手鎖かけ預ケ置宿仕

候者免許之願再応申出候ハ、宿并当人<sup>江</sup>重而訴状入候ハ

、可相咎旨申間当人<sup>ニ</sup>は右之趣証文申付日数<sup>ニ</sup>無構手鎖

可差免候但寺院ハ本寺触頭等浪人ハ地主家主等<sup>江</sup>預ケ置

免許之願申出候節是又前書之通申間証文取之可差免事

度と箱訴いたし手鎖<sup>ニ</sup>成候処

町在共 江戸拂

一 差免候後又候訴状入候者

全評 但宿預ケ又ハ手鎖申付置候処願不相止者も同断  
諸役人非分私曲有之旨訴并裁許仕置等之事 （六九オ）

一 諸役人を初其所之支配非分私曲等有之旨訴出候節其役人

支配人<sup>江</sup>一通り申達猶又不相濟由願出候ハ、先其旨相同

御差図次第取斗尤裁許之儀は相伺可申事

奉行所諸役人并私領おゐて前<sup>ニ</sup>裁許有<sup>ニ</sup>而<sup>ル</sup>事濟候儀を経年<sup>ニ</sup>月右裁許非分之由申立再吟味願差出候共取上申間敷候

然共訴訟方慥成証文等有之相手方<sup>ニ</sup>は証拠無之先裁許之必定過失相見候ハ、伺之上僉儀取懸<sup>リ</sup>可申事

但相手方不尋して不叶儀<sup>ニ</sup>候ハ、評儀之上其所支配人<sup>ニ</sup>或は地頭<sup>江</sup>一通り相尋可申猥<sup>ニ</sup>相手召寄申間敷事

一不願出候共奉行所<sup>ニ</sup>而<sup>ル</sup>評儀之上先裁許改可然儀は何之上可申付事

〔六九ウ〕

全評 公事吟味銘と宅<sup>ニ</sup>仕候事

一公事吟味之儀或日立合<sup>江</sup>差出即日不相濟儀ハ懸<sup>リ</sup>之奉行宅<sup>ニ</sup>而<sup>ル</sup>日数不懸様吟味を詰一座評儀之上裁許可申付事

但御代官手代掛り申間敷事

全評 重キ御役人評定所一座領知出入取斗之事

御老中 所司代 大坂御城代 若年寄

御側衆 評定所一座

右之分領知出入訴出候節不及伺取斗裁許之趣

相伺可申事

但質地并借金銀出入ハ定法有之儀<sup>ニ</sup>付不及伺候事

全評 重キ御役人之家御仕置<sup>ニ</sup>成候節其主人差扣伺之事

御老中 所司代 大坂御城代 若年寄

〔七〇オ〕

御側衆 寺社奉行 大目付 町奉行

御勘定奉行 御目付 大坂御城番 駿府御城代 遠国奉行

右家来徒士足輕中間等不届いたし 公義御仕置<sup>ニ</sup>成候共其主人差扣<sup>ニ</sup>不及候侍已上又は輕<sup>キ</sup>者<sup>ニ</sup>も徒党悪事いたし御仕置<sup>ニ</sup>成候ハ、差扣可相伺事

一遠国御役人ハ於其所家来悪事いたし御仕置<sup>ニ</sup>成候ハ、右之通可心得事

但表向は御役人<sup>ニ</sup>候共家来徒党悪事いたし御仕置<sup>ニ</sup>成候ハ、其節之様子次第差扣可相伺事

〔七〇ウ〕

全評 用水悪水并新田新堤川除等出入之事

諸国村と用水悪水并新田新堤或ハ川除等他領之懸<sup>リ</sup>合候出入訴出候時ハ御領ハ御代官私領は地頭家来呼出<sup>シ</sup>双方

障無之様熟談致可相済旨申聞訴状相渡其上不相濟段双方役人申出候ハ、其子細承取上可致吟味事

全評 論所見分并地改遣候事

一論所之事国境郡境<sup>ニ</sup>而<sup>ル</sup>も双方立合絵図と御国絵図大概相違無之<sup>ニ</sup>おゐてハ不及檢使裁許可有之候入組不申儀猥<sup>ニ</sup>

檢使差遣申間敷事檢使不遣候而難決義ハ国境郡境ハ御番衆御代官村境は御代官斗可差遣入組不申論所は郡境<sup>ニ</sup>而<sup>ル</sup>も其辺之御代官為致見分可有裁許事

〔七一オ〕

一 田畑山林等出入絵図付等<sup>ニ</sup>難分地改不仕候而は不相決候ハ、伺<sup>ニ</sup>不及最寄之御代官手代差遣地改為仕可申事

全評 論所見分伺書絵図等<sup>ニ</sup>書裁候品<sup>ト</sup>之事

論所之町歩反別ハ勿論証拠<sup>ニ</sup>引候諸帳面証文之文言之内其事之員数等書出し可申候絵図面<sup>ニ</sup>極候儀は右絵図入用之所斗を小絵図仕可差出候絵図面斗<sup>ニ</sup>不相分儀ハ其傍<sup>ニ</sup>断書を加へ可申但字数多候ハ、絵図<sup>ニ</sup>は番付之文言斗しるし別紙伺書番付之合紋付可差出事

一 絵図面之論外之分は不致彩色名所を付訴訟方相手方と肩書仕さし出し可申事

〈七二ウ〉

全評 裁許可取用証拠書物之事

御朱印ハ不及申讓狀古証文古水帳或ハ地頭出<sup>シ</sup>置候ハ、書付等其紙面疑敷儀無之<sup>ニ</sup>おゐてハ証拠<sup>ニ</sup>取用ひ可申私書記<sup>シ</sup>置候もの或ハ寺社縁起之類<sup>ニ</sup>不可取用之事

全評 寺社方訴訟人取捌之事

寺社訴訟人可届所<sup>江</sup>不届して願出添簡無之類ハ取上申間敷候強而相願候ハ、本寺触頭<sup>江</sup>相尋本寺触頭<sup>ニ</sup>可致吟味と申筋ハ本寺触頭<sup>江</sup>吟味可申付事

一本寺触頭を相手取候敷又は本寺触頭<sup>江</sup>願出候<sup>而</sup>も押置候付不得止事願出候類は諸簡無之候共取上可致吟味事

一 寺社之百姓地頭非分之儀申出候類ハ寺社寺社地頭寺院

〈七二オ〉

或は神主等呼出<sup>シ</sup>様子相尋品<sup>ニ</sup>寄取上可致吟味事  
一 寺院加<sup>リ</sup>候出入裁許申付候節は触頭又は本寺呼出し為承裁許状<sup>ニ</sup>奥印為致可申事

一 一宗法義之拘<sup>リ</sup>候公事訴訟之儀は取上申間敷候尤本寺触頭<sup>ニ</sup>各申付候而も及難洪候もの又は他宗俗人入交候出入ハ取上可致吟味事

全評 出入扱願不取上品并扱日限之事

火附 盜賊 人殺 人勾引 送罪者 名主等邪曲非分  
隠売女 博奕三笠附取退無尽巧事  
右之外<sup>ニ</sup>  
公義<sup>江</sup>掛<sup>リ</sup>候出入扱之儀願出候共為扱申間敷候事

〈七二ウ〉

一 公事扱願出候節日数廿日<sup>ニ</sup>可限但遠国<sup>江</sup>懸り合候出入は往來之日数を考其節之日数相極可申事

全評 誤証文押而取申間敷事

相手不致得心<sup>ニ</sup>押而誤証文取申間敷候たとへ誤証文差出候共其証文<sup>ニ</sup>か、わらず理非次第裁許可仕事

全評 盜賊火附詮議致方之事

盜賊火附詮議之儀盜賊放火附役<sup>江</sup>不相渡其手切<sup>ニ</sup>可致詮議事

全評 旧惡御仕置之事

送罪之者 邪曲<sup>ニ</sup>而人を殺候者 火附  
徒党いたし人家<sup>江</sup>押込候者

〈七三オ〉

追剥并人家<sup>江</sup>忍入候盗人

一 都<sup>而</sup>

公義之御法度を背き死罪已上之科<sup>ニ</sup>可被行者

但役儀<sup>ニ</sup>付都而私欲押領いたし候者ハ輕候共相応之

咎可有之事

一 惡事有之永尋申付置候者

右は旧惡<sup>ニ</sup>候共御仕置相伺可申候此外之科一旦

惡事いたし候共其後相止候由申之尤外之沙汰も

無之<sup>ニ</sup>おゐてハ十二ヶ月以上之旧惡ハ不及各事

但十二ヶ月内より吟味取懸り十二月已後吟味済候共

旧惡<sup>ニ</sup>ハ不相立事

〈七三ウ〉

全評 裁許并裏判不請者御仕置之事

一 裁許不請者

中追放

一 裏判并差紙不請もの

所拂

一 裁許相済候儀を内証<sup>ニ</sup>而不用破候者 中追放

全評 関所を除き山越致候者并関所を忍び通り

候者御仕置之事

一 関所難通類

其所おゐて 磔

但男<sup>ニ</sup>被誘引山越いたし候女ハ奴

一同案内いたし候者

同

一同忍び通り候もの

追放

但女ハ奴

〈七四オ〉

一 御留番所を女を連忍び通り候者

但女ハ領主<sup>江</sup>可相渡

全評 隠鉄炮有之村方咎之事

一 隠鉄炮致所持候者

一 隠鉄炮打候者

一 隠鉄炮所持之村方

一 他処より参り打候村方

一 隠鉄炮所持致候者五人組

一 隠鉄炮打候村方惣百姓

一 廻り場之内鉄炮三度以上

一 打候を不存候ハ、

但野廻り之居村<sup>ニ</sup>而隠鉄炮所持いたし候者有之<sup>ニ</sup>おいて

ハ役儀可取放

一 隠鉄炮打候を捕候者

一同訴人仕候者

一 網或ハ繃<sup>ニ</sup>而鳥殺生致候者

一 鳥殺生致候村方并居村

一 隠鳥を売買致候者

一 御留場<sup>ニ</sup>而鳥殺生致候者御仕置之事

一 網或ハ繃<sup>ニ</sup>而鳥殺生致候者

一 鳥殺生致候村方并居村

一 隠鳥を売買致候者

中追放

遠鳥

中追放

所拂

右同断

重キ 過料

急度叱

過料〈七四ウ〉

輕キ 過料

鳥番

野廻り役儀可取放

銀貳拾枚

銀五枚

過料

過料

過料

過料

過料

過料

過料

過料

過料

過料

過料

但度と売買いたし候共同断

全評 村方戸メ無之事

村方戸メハ不申付軽<sup>キ</sup>儀は叱り又ハ過料夫<sup>ト</sup>之御定有之事

但江戸町続村町奉行支配之町之分ハ戸メをも可申付然

共過料<sup>ニ</sup>而可<sup>レ</sup>済分ハ過料たるへし村中<sup>ニ</sup>而も侍<sup>ニ</sup>之者ハ戸メも可申付事

(欠) 村方出入<sup>ニ</sup>付江戸宿雜用并村方割合之事

一都<sup>ニ</sup>公事或ハ願之義<sup>ニ</sup>付江戸宿詰居候内之雜用は双方共

一村<sup>江</sup>懸り候儀は銘<sup>ト</sup>持高割<sup>ニ</sup>可申付其身一分之出入は

当人より可差出若難差出身上<sup>ニ</sup>候ハ、親類割合可申付候

〈七五ウ〉

然共邪成不屈之儀願候を五人組之者共乍存異見をも不加

其分捨置為相願候ハ、不埒<sup>ニ</sup>候間右之類ハ五人組<sup>江</sup>も割

合可申付事

一公事相又ハ願等之儀<sup>ニ</sup>付吟味之内江戸宿預<sup>ケ</sup>成候雜用一

村<sup>江</sup>懸り候儀ハ村方<sup>江</sup>割可申其身分<sup>ノ</sup>儀ハ当人より可為

出候其者御仕置<sup>ニ</sup>成候ハ、身<sup>ノ</sup>限可償<sup>之</sup>

一都<sup>ニ</sup>村方より狼藉又ハ不屈<sup>ノ</sup>者之類<sup>ハ</sup>百姓心附召捕出候節は

路用并江戸逗留<sup>ノ</sup>之入用

公儀より可被下之若他所より差口或ハ外より願出候而奉

行所并御代官所より捕<sup>ニ</sup>遣

附捨置候義不念<sup>ニ</sup>候間村中割合<sup>ニ</sup>可申付事 〈七六オ〉

一公儀并地頭<sup>江</sup>相納候役懸り其外村入用公事出入之

入用等之儀可為高割事

但入作り百姓共<sup>ニ</sup>一同割合可申付事

一山方野方浦方或ハ漁浜等無高又は小高<sup>ニ</sup>而家数

多場所家抱下人共人別割之可申付事

但妻子ハ人別<sup>ニ</sup>可除事

一山林野原之類入会地を割取候節は入作百姓

をも一同可為高割事

一祭祀入用勸化奉加等之儀は申合可為こ、ろ

次第事

一前と割合極置出入無之所は可為只今迄之通事 〈七六ウ〉

全評 人別帳<sup>ニ</sup>も不加他之者差置候御仕置之事

人別帳<sup>ニ</sup>も不加他之者

当人并差置候者 所拂

差置候もの

名<sup>七</sup>重キ過料

組頭 過料

全評 賄賂差出候者御仕置之事

一公事諸願其外請負事等<sup>ニ</sup>付而 賄賂差出候者取持いたし候者 輕追放

但賄賂請候者其品相かへし申出<sup>ニ</sup>おゐてハ賄賂差出者

并取持致候者共<sup>ニ</sup>村役人<sup>ニ</sup>候ハ、役儀取上平百姓<sup>ニ</sup>候

ハ、過料可申付事

全評 御仕置<sup>ニ</sup>成候者闕所之事

磔 火罪 獄門 死罪 遠島 重追放 〈七七オ〉



右御仕置申付候者ハ田畑家屋敷家財等闕所可申付中追放  
ハ田畑屋敷輕追放ハ田畑斗闕所可申付家財ハ中輕共不及  
闕所吟味之内致病死候共吟味詰御仕置可申付者ニ決置候  
上病死いかやう候共同ニ成御仕置之者ハ伺之上闕所可  
申付事

但下手人ハ不及闕所無外專利欲ニ拘り候類ハ江戸十里  
四方追放并所拂ニも田畑家屋敷闕所可申付貧たる儀  
無之おゐてハ不及闕所

一 妻子之諸道具其外寺社付之品は構無之事

一 御扶持人ニも重追放以上は闕所仕方同斷

一 中追放輕追放ハ家屋敷斗闕所家財ハ不及闕所事

〈七七ウ〉

一 私領百姓

公義御仕置ニ成田畑家財共闕所之節は地頭江取上可申旨  
可相違事

但田畑實地ニ入置候ハ、証文吟味之上定法之質地無相  
違ニおゐてハ質入之田畑拂代金之内を以質ニ取候者江元  
金可相渡金高不足ニ候ハ、地面為可相渡若又年貢滞り

有之ハ右質入地面拂代金を以先ニ年貢引取質取主江は  
殘金之内を以取金可相渡尤金高不足之分ハ金主可為損

失事

一 夫御仕置ニ成り闕所之節妻持參金并持參之田畑家屋敷も  
可致闕所事

〈七八オ〉

但妻之名附ニ而ニ有之分は不及闕所事

一 御仕置ニ成候者又ハ欠落もの闕所之節当人借置候金子并  
壳掛金手形帳面等有之候共借主より不及上納候事

但借金之儀ニ付不埒之儀も有之候ハ、取立可為致上納  
事

一 町在共家屋敷質ニ入置候者御仕置ニ成右家屋敷闕所之節  
金子請取度旨願出候ハ、証文吟味之上相違於無之は是又  
質地同前可申付事

全詳 地頭江対し強訴其上致徒党逃散之百姓御仕置之事

一 頭取 死罪

一 名主 重キ追放

一 組頭 田畑上ケ所拂 重キ追放 〔七八ウ〕

一 惣百姓 持高ニ過料ニ應し

但地頭申付非分有之ハ其品ニ應し一等も二等も輕く可  
相伺未進無之ニおゐてハ重キ咎ニ不及事

村ノ百姓結徒党令騒動強訴  
一 或ハ逃散之者在之節名主又ハ組頭等  
取領候者御褒美銀被下之其身  
差押不為加徳党村方有之おゐてハ  
一 生帯刀致し苗字ハ長ク可為名乗候

但其品輕キハ御褒美銀斗被下之事

全詳 身軀限申付方之事

一 田畑屋敷家藏家財

但他所ニ家藏有之分も取上尤建主立合吟味之上金高不  
足ニ候ハ、追而身上取立次第可相拂旨申付金高より余

分於有之ハ滯金ニ応し為相渡可申候小作滯身限田畑  
家敷ハ  
〔七九才〕

家主江渡置候上年と作徳を以滯金相済ニおゐてハ地所  
元地主江為相返候事

一店借ニ候ハ、  
家財取上  
但地借ニ而家作自分ニ仕候ハ、家財家作共取上可申事

全評 田畑永代売買并隠地致候者御仕置之事

一田畑永代売候者  
当人過料  
加判名主  
証人叱り  
役儀取上

一同売候者  
永代売主之田畑取上

一高請無之開発新田畑等之外  
浪人侍等所持之田畑  
永代売無構

一質ニ取候者作取ニして質置主  
質置主過料  
質ニ取候者地面取上過料  
加判名主役儀取上  
証人叱り

〔七九才〕

一隠地いたし候者  
中追放

全評 質地小作取捌之事

一年季明十ヶ年過候質地  
流地

但流地之文言無之証文ハ年季明十ヶ年之内訴出候ハ、

濟方可申付

一年季内之質地  
年季明ヶ請戻し候様  
可申付  
質入之年より十ヶ年過候ハ、  
流地  
一次第可請戻証文

一拾ヶ年以上年季質地  
無取上

一質地名所并位間無之或ハ  
名主加印無之不埒証文  
年限之無差別無取上名主  
過料尤名主質入之義不存  
証文於不致加判ハ不及答

但右金主地主承届相對之上地主を定水帳可相改旨名主  
江可申渡尤名主質地相名主無之村方ハ組頭加印於有之  
ハ  
〔八〇才〕

定法之通濟方可申付

一年季明不請戻候ハ、可致  
年季明ハ期月より二ヶ月過  
訴出候ハ、流地

但年季明不請戻候ハ、永く支配又は子と孫と迄構無之

旨且又此証文を以可致支配或ハ可致名田抔之文言流地

之証文ニ准可申付

一質地元金濟方申付候上返金滯候ハ、  
地面金主江渡流地

但直小作滯候ハ、可為云日指事

一質地証文之文言宜小作  
証文不埒ニ候ハ、  
質地定法之通裁許  
小作滯分不申付

又質ニ元地主加判有之証文  
元地主江濟定法之通  
可申付

但又質之節増金借受候ハ、其分ハ又質置候者ニ

濟方可申付事

〔八〇才〕

一御朱印地寺社領屋敷共  
讓渡質ニ入候寺社  
江戸十里四方  
追放

但讓受質取候者地面相違させ重過料可申付

一小作滯

質地日限之通申付其上  
相滯候ハ、身限可申付

但作徳之儀米金共主小作人極之通濟方可申付事

一 小作証文無之候共別小作  
無相違本証文定法之通候ハ、  
質地元金斗裁許申付小作  
滞ハ不申付候尤地面ハ小作人より  
地主へ可為引渡

但直小作<sup>ニ</sup>而証文無之分ハ書入<sup>ニ</sup>准本証文宜共質

地之法<sup>ニ</sup>ハ裁許不申付事

一 小作証文無之候共質地証文  
小作之儀書かへ有之候ハ、  
質入金小作金共<sup>ニ</sup>可申付

一 家守小作滞請狀之通無  
相違おみてハ  
当人請人共濟方申付滞候得ハ  
兩人共身躰限可申付

一 質地之年貢斗金主より差出  
諸役<sup>ニ</sup>ハ地主相勸候証文  
年季之内<sup>ニ</sup>候ハ、定法之通証文為仕置  
質取過料  
加判名主過料

〈八一才〉

但年季明<sup>ニ</sup>候ハ、地面可請戻年季明二ヶ月過候ハ、定

法之通流地申付兩様共本文之通答可申付事

一 質入之地面を半分直小作致し質  
地之高不殘年貢諸役共地主より相納候証文  
右同斷

但右同斷

一 式拾年已上之名田小作ハ

永小作<sup>ニ</sup>可申付

一 質地元金年季之内内濟致し  
一年季明ハ殘金為之旨於及出入候ハ  
内濟金子ハ地主<sup>互返シ</sup>  
流地

一 質に取置候地面直小作滞  
之儀金主訴出候<sup>おゐてハ</sup>  
小作滞斗濟方可申付

但日限之通不相濟候ハ、地面取上<sup>ニ</sup>可相渡

一 質地元金并直小作滞日限濟方申付候節ハ小作

滞候事之金高ハ無構<sup>ニ</sup>元金日限之通可申付事  
〈八一ウ〉

全評 質地滞金米日限定之事

- 一 五兩以下
- 一 五石以上
- 一 五兩以上拾兩迄
- 一 五石以上十石迄
- 一 拾兩以上五十兩迄
- 一 十石以上五十石迄
- 一 百兩以上
- 一 百石以上
- 一 式百兩以上
- 一 式百石以上

同 拾三ヶ月限

右日限<sup>ニ</sup>准之濟方申付相滞候ハ、地主金主<sup>江</sup>為相渡

可申候尤其人之身上<sup>ニ</sup>応し取斗可申事

全評 借金銀取捌之事

- 一 借金銀 一 祠堂金 一 官金 一 書入金
- 一 取替金 一 先納金 一 手附金 一 持參金  
〈八二才〉

一 壳掛金 一 仕入金 一 職人手間賃金

一 諸道具預<sup>ケ</sup>証文<sup>ニ</sup>而金子借候類  
一 諸物売渡し証文<sup>ニ</sup>而金子借候類

一 御家人又は御用達町人等拜領屋敷地代店賃を書入金子借

候類右之分延享元子年以來之滞ハ毎月四日廿一日呼出し

三十日限濟方可申付右日限之節少とも相濟候ハ、壹ヶ月

兩度も切金<sup>ニ</sup>為差出其上<sup>ニ</sup>而濟方不埒<sup>ニ</sup>候ハ、身躰限可申

付事

但呼出し候節不埒等いたし候敷又は濟方申付候而も

不埒之輩為之ハ武士は御老中<sup>江</sup>申達寺社在町方は

急度答可申付且又不埒之貸方之類ハ遂吟味其品<sup>ニ</sup>

より金主之者可相答事

（八二ウ）

右毎月兩度借金銀公事訴訟斗承之

裁許可申付事

全評 借金銀分散申付方之事

（八三ウ）

一地代金  
一店賃金

三拾日限済方可申付  
右同断

右二ヶ條日限不相済候ハ、切金為差出其上済方

不埒候ハ、身躰限可申付事

一連判之証文有之諸請負徳用割合請取候定

一芝居木戸錢

仲満事付無取上

一無尽金

右同断

但証文健有之候共仲満事決候付而は一向取上申間

敷事

一 日寄せ附込帳記し候  
借金印形無之分

無取上

一 宛所無之  
証文

右同断

（八三オ）

家賃金滞日限定

（八四オ）

一 証文等利足書載有之  
其所印形無之利足

右同断

一 家賃金質金并諸借金宛所  
違之証文を以於訴出候而は

右同断

但証文讓請候由申候共証拠於無之ハ取上申間敷事

一 家賃  
諸借金 利足

一 割半以上之分ハ  
一 割半可直

一 百姓を相手取候借金出入地頭借相聞候共地頭裏印并

役人奥印於無之ハ地頭借不相立事

全評 借金銀取捌定日之事

一 毎月四日 廿八日

右毎月兩度借金銀公事訴訟斗承之

全評 借金銀分散申付方之事

金銀借方之者身躰分散之節貸方之内少と不得心之者有之  
由願出候ハ、分散請候様申聞若不得心候ハ、得心之  
者斗分散割合為相渡可申候尤借方之者身上持次第割合請  
取候者も不請者も一同追而相懸候様可申付事

全評 家賃并船床髮結床書入証文取捌之事

一家賃金

但日限之上於滞は家賃可為相渡日限之内之  
宿賃も済方可申付候尤年季之内も家賃

滞三ヶ月迄訴出候ハ、取上可申事

何ヶ年已前も金高相応  
日限済方可申付

一家賃金

一金三十拾兩以下

一金三十拾兩以上

一金五十拾兩以上

一金百兩

但百兩有餘は見合日限可申付

一金千兩以上

右日限之内之宿賃も済方可申付事

一 押領屋敷家賃入及

屋敷御取上屋敷

四月共 十二ヶ月限

二月共 十二ヶ月限

一月共 十二ヶ月限

一月共 十二ヶ月限

一月共 十二ヶ月限

一月共 十二ヶ月限

一月共 十二ヶ月限

出入おゐてハ

百日押込

但書入<sup>ニ</sup>致し金子借り候も家賃金同斷  
之事

（八四ウ）

一 髮結床并廻り場所或ハ  
船床書入証文

家賃<sup>ニ</sup>准金高<sup>ニ</sup>応し  
日限濟方可申付

但日限之上相滞候ハ、証文之品為相渡可申事

一 寺社附之品書入又は売渡  
証文を以金子貸渡致候<sup>ニ</sup>おいてハ

借主追放  
証文寺院<sup>ニ</sup>候ハ、逼塞  
俗人<sup>ニ</sup>候ハ、手鎖

但金主ハ不埒之貸方<sup>ニ</sup>候間濟方之不及沙汰

一 槌成質物を以借候金銀

家賃<sup>ニ</sup>准金高<sup>ニ</sup>応し  
日限濟方可申付

一 為替金

家賃金同然金高<sup>ニ</sup>  
応し日限濟方可申付

但日限之上滞<sup>ニ</sup>おゐてハ家賃可相渡事

全評

二重質<sup>ニ</sup>二重書入<sup>ニ</sup>二重売御仕置之事

田畑屋敷<sup>ニ</sup>二重質入致候者

質入主中追放  
名主輕追放  
加判人所拂

（八五オ）

但二重書入も同様田畑屋敷建家等ハ初之金主<sup>江</sup>相渡後

之金主<sup>江</sup>は家財取上可相渡尤名主加判人馴合礼金取候

ハ、中追放後之金主乍存質地書入等証文取<sup>ニ</sup>おゐてハ

江戸十里四方追放

諸商物代金請取之品不渡外<sup>上</sup>

一 二重売致し又は取次可遺言品質

置并売拂或ハ金銀横取致し候者

金子八十兩以上  
雜物ハ代金積り十兩以上ハ  
同以下 入墨敲

但先ッ入牢申付代金又は商物<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>成共相濟<sup>ニ</sup>おゐてハ

死罪

拾兩以上は江戸拂申付拾兩以下ハ所拂

右之品買取候者若不念之品為之其品取上可申事  
廻船荷物出売出買并船荷物押領致し  
候者御仕置之事

（八五ウ）

一 廻船荷物出売出買致候者

但荷物代金共取上荷物ハ問屋<sup>江</sup>相渡可申事

一 打物荷物或ハ破船と偽荷物押  
領いたし候者

壳主買主共 重キ過料  
船頭獄門  
上乘同罪  
水主入墨之上重敲

但吟味之上浦証文ハ有之候共類船無之差而船いたみ

不申処打荷いたし候<sup>ニ</sup>おゐてハ船頭過料十貫文上乘

同三メ文水主無構

一 難風<sup>ニ</sup>逢打荷致殘荷物を  
盜取候船頭と馴合浦証文  
差出配分取候名主

其所おゐて 獄門

一 同盜荷物を自分土蔵へ入  
預り置配分取候者

死罪

一 同船頭之宿致し馴合村中之  
者<sup>ニ</sup>申勸メ配分取候者

遠嶋

（八六オ）

一 同百姓之内重立持運ひ  
世話いたし配分取候者

重追放

一 同盜荷物 惣百姓 配分品取上村高<sup>ニ</sup>応し 重過料

一 借金并白紙手形<sup>ニ</sup>配分品取上村高<sup>ニ</sup>応し 重過料  
借金并白紙手形金銀貸借致候者御仕置之事

一 借金并白紙手形<sup>ニ</sup>而<sup>ニ</sup>質地借金等取やり仕候者不埒<sup>ニ</sup>付  
濟方之不及沙汰双方共并証文共過料可申付事

但金主借主過料員數之儀は例<sup>ニ</sup>不抱身上<sup>ニ</sup>応し重く

但金主借主過料員數之儀は例<sup>ニ</sup>不抱身上<sup>ニ</sup>応し重く

可申付事

全評 偽之証文を以金銀貸借致候者御仕置之事

金銀借用之証文及露頭候而は  
難立筋又は支配頭或ハ頭候而申分  
難相立者之名を偽文言之内  
書入金銀借候者

死罪

但右之趣乍存貸候ニおいてハ貸候者も同罪 (八六ウ)

全評 讓屋敷取捌之事

一 讓請候町屋敷町内江弘メ無之  
町名前不改類及出入候ハ、

屋敷取上

全評 奉公人請人御仕置之事

一 奉公人給金滞

十日限請人江濟方可申付

但日限之節半金も差出候ハ、十日之日延其上ニ而

滞候ハ、身躰限可申候尤主人より請人主江相懸り候

ハ、兩人江可申付事

一 武士方奉公人を人主ニ取候者 右同断

但右同断

一 給金出入主人之家主へ相届預り証文

家主江給金濟方并尋可申付

取置候以後請人於致欠落ハ、  
但右立替金請人之店請江家主懸り候共申付間敷事

(八七オ)

一 奉公人病氣ニ付宿江下り 給金不相濟候ハ、請人欠所 江戸拂  
外江奉公ニ於出候ハ、 奉公人同

但給金相濟候共請人過料奉公人手鎖

一 取逃引負致候者江請人引渡請人より 取逃引負金共請人江  
可濟証文取置候上奉公人於致欠落ハ、 濟方可申付事

但引請之証文於無之ハ欠落尋斗可申付事

一 欠落奉公人

但取逃致し候者六切日延尋可申付事

請人三十日限尋可申付  
三切日延之上於不尋出過料

一 取逃之品於売拂ハ 買主より為戻可申

但金子杯ハ遺捨候事分明ニ候ハ、すたりニ可致事

一 取逃之儀乍存奉公人 江戸十里 追放  
隱置候請人人事

一 奉公人給金請人取替相濟候  
以後下請人懸り候節ハ、

二十日限濟方可申付

(八七ウ)

一 欠落奉公人を請人見出し  
当宿江於預ケ置候ハ、

立替候給金当宿江  
二十日限濟方可申付

但奉公人方江引取候上欠落致し候ハ、受人方江罷在候

内之雜用共当宿江濟方可申付候先達而下請人江立替懸

り候ニおゐてハ当宿江過料可申付尤慥成証文取之差置

候ハ、其下請之者ニ可申付欠落者ハ引返度旨請人相願

候ハ、為引返可申付候事

一 武士方町方共欠落一通り  
ものを尋出於召捕候ハ、

請人江相渡心次第可申付主人  
請取度旨願候ハ、主人江可相渡

但欠落致し三日之内他所ニ而致悪事候ハ、主人方江

為引取欠落ニ立申間敷事

一 人宿之外素人宿之分ハ、

親類并同国之好身ニ候ハ、  
拾人迄ハ可為致請判

(八八オ)

一 奉公人請人店出無之出入ハ、  
家主引請相濟当人店立  
於願出候ハ、

当人ハ門前拂申付追而  
住居見届家主願出候  
節身躰限可申付

一 自分之名を替奉公人之  
請ニ立候者

江戸十里 追放

但奉公人と馴合判賃之外給金之内をも配分取為致

欠落候ハ、死罪

一 人之任業と相見寄子之  
變死を不存分<sup>ニ</sup>致し候者

所拂

但人<sup>ノ</sup>之任業と不相見候共致變死候を不訴出分ハ叱り

一 寄子欠落いたし參り候儀ハ  
存候得共盜人と不存宿致  
雜物置置主<sup>ニ</sup>成世話致し遣し  
配分を取候者

江戸  
十里四方 追放

一 取逃之雜物を預り置配分致し  
又ハ礼金を取当人を隱置候請人  
家主

死罪

〔八八ウ〕

一 奉公人と馴合欠落為致候請人 重敲

但式度已上<sup>ニ</sup>候ハ、請人死罪

一 寄子之内欠落及七度  
不尋出請人

江戸拂

一 組合人宿寄子之内を  
自分請<sup>ニ</sup>立置候奉公人  
欠落いたし主人より断有之  
奉行所<sup>ニ</sup>給金濟方申付候宛  
其人宿も於致欠落候

給金滞ハ人宿組合  
償可申付致欠落候  
人宿之尋ハ家主<sup>ニ</sup>申付  
於不尋出ハ過料可申付

一 組合人宿<sup>ニ</sup>無之好身之  
者<sup>ハ</sup>付人主印形ハ有合之  
判を用ひ自分之請<sup>ニ</sup>立  
出<sup>シ</sup>置候ハ、主人欠落致し  
候処主人方<sup>ニ</sup>不相帰又ハ請<sup>ニ</sup>  
立外<sup>ニ</sup>於奉公出候ハ、

給金相濟候ハ、  
請人 闕所  
奉公人 江戸拂

但給金相濟候共請人過料奉公人手鎖

〔八九オ〕

全評

欠落奉公人御仕置之事

一 手元<sup>ニ</sup>有之品をと風  
取逃いたし候者

金子ハ十兩以上雜物ハ  
代金<sup>ニ</sup>積<sup>リ</sup>十兩位より以上  
同已下 死罪  
同已下 入墨敲

但先入牢申付取逃之品償候<sup>ニ</sup>おゐてハ拾兩以上并

以下共主人願之通助命申付江戸<sup>ニ</sup>不罷在様可申付事

一 使<sup>ニ</sup>為持遺候品取逃  
いたし候者

金子ハ十兩以上  
雜物ハ代金積<sup>リ</sup>十兩位より以上  
同已下 死罪  
同已下 入墨敲

但入牢申付取逃之品償候<sup>ニ</sup>おゐてハ壹兩以上以下共主

人願之通助命申付江戸<sup>ニ</sup>不罷在様可申渡事 〔八九ウ〕

一 巧候儀も無之輕く取逃致候者 敲

一 給金錢取主人方<sup>ニ</sup>不引越者 同

一 度々欠落いたし候者 重敲

一 主人之金子を持出博奕打候者 同

一 引負いたし候者<sup>ニ</sup>向  
弁金無之<sup>ニ</sup>おいてハ 金高<sup>ニ</sup>必し 五拾敲  
百敲

但中人并親類之身上<sup>ニ</sup>必し引負金高三分一  
五分一又は十分一相濟候ハ、中人出牢之上追而  
身上殘次第幾度も主人方より相懸り候様可申  
付事

〔欠〕 欠落もの之儀<sup>ニ</sup>付御仕置之事

〔九〇オ〕

一 請合人も無之欠落者を  
囲置候者

過料

一 欠落者闕所に可相成  
一家屋敷を隱置候<sup>ニ</sup>おいてハ

名主役氏取上 過料五メ文  
家主 重キ過料  
五人組 過料

一 夫家出致し行多不相知者之妻  
外<sup>ニ</sup>縁付無度旨願出候<sup>ニ</sup>おゐてハ

家出致し候月より十ヶ月過  
候ハ、可縁付旨可申渡

(欠) 捨子之儀ニ付御仕置之事

一 金子を添捨子を貰ひ其子を捨候者

一同切殺メ殺候ニおゐてハ

一 捨子有之を内証にて隣町等<sup>ニ</sup>又候捨候儀於顯ハ

引廻 獄門  
之上 磔

当人所拂  
家主過料  
五人組過料  
名主江戶拂

但吟味之上名主五人組家主等不存儀無紛候ハ、無構

(九〇ウ)

(欠) 養娘を遊女奉公ニ出シ候者之事

一 輕<sup>キ</sup>者養娘を遊女奉公ニいたし候者

但卑賤之者<sup>江</sup>養子ニ遣らハ実方<sup>ニ</sup>も其心得可有之事候間

証文有之候共無取上然共養娘格別及難儀候事を養父

取斗候ハ、可遂吟味候実子<sup>ニ</sup>而も親之仕方外之儀<sup>ニ</sup>候

ハ、吟味之上相応之御仕置可申付事

実方より訴出候共無取上

一 寺社門前屋敷

但寺院神主ハ寺社奉行<sup>ニ</sup>而叱り置自分<sup>ニ</sup>而遠慮

いたし候様可申付事

一同地借り町屋之分ハ

右同断

但寺院神主等咎右同断

一 商物を出し渡世致し候者

妻同心せざるに売女出候者

但飢渴之者夫婦申合売女為致候上<sup>ニ</sup>而、盜等之

悪事無之候ハ、不及糺明候事

一 踊子呼置売女為致候

料理茶屋

所拂  
家主過料  
地主重キ過料

但地主其所<sup>ニ</sup>不罷在地<sup>ニ</sup>罷在候ハ、叱り

(九二才)

一家主

但家主建置候家蔵有之候ハ、五ヶ年之内

身上<sup>ニ</sup>必し過料之上百日  
手鎖隔日封印改

一名主  
五人組

無構

店賃為相納可申候

一 五人組

過料  
重キ過料

一 地主

但外罷在候共右同断ニ取斗又は売女置候ハ、幾度も

同様ニ申付明地<sup>ニ</sup>は申付間敷候

一 御扶持人又は御用達  
町人拝領屋敷

但右同断

右同断

(九一ウ)



一 隠し売女誘引出し候<sup>ニ</sup>おいてハ 男女共 無構

但女ハ誘引出し候者之方<sup>江</sup>成共外<sup>江</sup>參り候共心次第

可申付事

全評 密通御仕置之事

一 密通をいたし候妻 死罪

一 密通之男 同断

一 密通之男女共<sup>ニ</sup>夫殺候ハ、於無紛ハ 無構

一 密夫を殺妻存命<sup>ニ</sup>候ハ、死罪  
其妻

但密夫逃去候ハ、妻ハ夫之心次第<sup>ニ</sup>可申付 〈九二ウ〉

一 女同心無之密通を申懸ケ或ハ  
一家内<sup>ニ</sup>忍入候男を夫殺候時不儀  
申懸候証拠於分明は 男女共 無構

一 夫有之女<sup>江</sup>密通し  
手引いたし候者 中追放

一 密夫いたし実の夫を殺候女 引懸 之上 磔

但実之夫を殺候様<sup>ニ</sup>勸候歟又は手伝致し殺候男獄門

一 主人之妻と密通致候者 男ハ引懸シ 獄門 死罪

一 主人之妻<sup>江</sup>密通之手引  
いたし候者 死罪

一 夫有之女得心無之<sup>ニ</sup>押而  
不義いたし候者 死罪

但大勢<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>不儀いたし候ハ、頭取獄門同類重<sup>キ</sup>追放

一 密夫之御仕置妻妾都<sup>レ</sup>而無差別

一 養母養娘并姉と密通致候者 男女共 獄門

〈九三オ〉

一 姉妹伯母姪と密通致候者 男女共 遠国非人手下

一 離別状不遣<sup>前カ</sup>後妻を呼候者 所拂

但利欲之筋を以之儀<sup>ニ</sup>候ハ、家財取上江戸拂  
髪を剃親元<sup>江</sup>相返ス

一 離別状不取他<sup>江</sup>嫁候女 髪を剃親元 相返ス

但右之取持いたし候者過料

一 離別状無之女他<sup>江</sup>縁付候親元 過料

但呼取候男同断

一 主人之娘と密通致候者 中追放

但女ハ手鎖かけ親元<sup>江</sup>相渡ス

一 主人之娘<sup>江</sup>密通之致手引候者 所拂

一 幼少<sup>江</sup>不儀致し怪我為致候者 遠嶋 〈九三ウ〉

一 女得心無之押而致不儀候者 重<sup>キ</sup>追放

一 夫無之女と密通いたし 女ハ為相掃 男ハ手鎖

一 誘引出し候者 主人<sup>江</sup>引渡遣ス

一 下女下男之密通 男ハ江戸拂 女ハ主人心次第可為致

一 他之家来又ハ町人等下女と  
密通いたし忍入候者 所拂

一 夫有之女と密通いたし候男<sup>ニ</sup>  
被頼女を貰懸候者

一 夫有之女艶書ハ度々取  
かわし候得共密会不致義 中追放

一 無紛<sup>ニ</sup>おいてハ （あさい けいこ） 〈九四オ〉